

「顔が見える国際貢献」

平成 15 年 11 月 20 日(木)

講演者： 野田順康、国連ハビタット福岡事務所長

講演場所： 福岡虹の会 11 月例会 （於 福岡国際ホール）



ハビタットの活動と福岡事務所

私が今胸に着けております国連ハビタットのロゴは、「丸いのが地球、その上に人間が住んでいる、人間が住むためには住宅が必要」という考えを現したものです。

世界の人々の幸せを「まちづくり」という視点から考え、その改善のために行動しているのが、国連人間居住計画（ハビタット）という国連機関で、1978 年にケニアのナイロビに本部事務所が設立されました。世界に、福岡を含めて 3 つの地域事務所と 7 つの後方連絡事務所を置いています。福岡事務所の職員数は 20 数名で、活動対象国は、アジア太平洋の 28 カ国で、現在、71 の住宅、街づくりの事業を展開しています。福岡事務所の事業規模は年間 60 億円で、これは日本にある国連機関の中では最大規模とっていいでしょう。

また、担当している地域は、西はイラクから東は日付変更線までです。現在、最大の問題を抱えている地域がアフガニスタンで、ここだけで 30 億円を超える事業を展開しています。所得が日本の百分の一位ですから、およそ 3000 億年に匹敵する事業をやっていることになります。

基本姿勢はパートナーシップ

ハビタットのもっとも特徴的なことは、パートナーシップ、つまり地元住民と連携、協

力をしながらやっていくということです。その地のコミュニティに住んでいる人たちが、自分たちで住宅を建てる、自分たちで街づくりをやるということを支援するのが基本的な姿勢です。

国連の難民対策はもっぱらテントをあげる、毛布をあげる、水をあげる、食料をあげる等、「あげる」ことが中心ですが、このように「あげる」という行為が続くと人間は駄目になってしまいます。ハビタットは住民の自立・参加による住環境づくりを支援する機関なのです。



アフガニスタンのカブールでの活動を例にとってみましょう。

カブール市の西側は住宅が完全に崩壊して人が住める状態ではありません。こういうところにパキスタンとかイランに逃げていた人々が戻ってきています。単位にすると、1年間に150万位の人が帰ってきます。1年で福岡市位の人口が増えるということです。カブールには、タリバンの拠点がありましたから、米軍がピンポイントで爆撃をやりましたが、誤爆によって多くの住宅が破壊されてしまいました。

こういうところで、住民参加型で住宅を再建しています。煉瓦は日干し煉瓦で、子供たちも一緒になって足で踏んで作ります。技術的な指導のほか、柱、窓枠、屋根など素人では出来ないものだけ援助いたします。そうすると家一軒が5万円で出来るわけです。昨年は1年間で1万戸作りました。ちなみに神戸の仮設住宅は1戸400万円でした。



イラクの現状と活動状況

今一番問題になっているイラクでは、1997年から主に北部で事業をやっています。過去5年間の総予算が720億円、600人の職員を展開しています。住宅2万戸、学校が700、そのほか病院や道路を建設しており、国連ハビタットが、現在、地球上でやっている一番大きなプロジェクトです。77月にイラクに行って参りましたが、街の中は建物は残っているが、略奪と放火で中には何も残っていません。治安が猛烈に悪化して厳しい状況でした。街の中を米軍の戦車がパトロールしていますが、1日に数件、米軍が攻撃され死傷者が出ています。帰国して、イラクはまだ戦闘状態だと申しましたら、毎日新聞が大きく報道いたしました。イラクは過去11年、戦争をしていますから、戦闘で夫を失った家庭は55万位といわれています。こういう家庭を回ると、1部屋に8人から10人が住んでいます。その中で2年前に外務省をクビになったという女性に、「戦争が終わったから改善するんじゃないですか」と申し上げたら、「あなた方は、いつも、明日は今日よりよくなると思って暮らしていますが、私たちはいつも明日は今日より悪くなると思って生きています」という返事が返ってきて、胸をつかれる思いがしました。こういう人たちのために住宅再建をやろうと、がんばっています。



重要課題・人口爆発と水

今後の大切な課題として、世界における都市化、いわゆる人口爆発があります。2000年の時点で、世界の人口は62億人ですが、今後30年で、21億人増えるといわれています。この21億の人口が発展途上国のマニラ、バンコク、クアラルンプールといった大都市に張りつくといわれています。ほとんどが貧困層なので、新たに21億人分のスラムが出来るわけです。

国連ハビタットは、スラムの住宅の改善問題に力を入れていくことにしています。人口が増えると発展途上国の大都市では水が不足してきます。今年が国際淡水年、水の年ですが、世界の水の衛生状況はと申しますと、5人に1人は安全な水が飲めない、そして、発展途上国を中心に毎日6000人の子供が水に関連した下痢で死亡しています。人口が増えると発展途上国の大都市で水が不足してきます。

スラムには水道なんかありません。水を求めて人々は川べりにやって来ます。子供たちは汚水の中で平気で泳いでいますし、アフリカでは水を運ぶのは子供たちの仕事です。汚い

水を飲んではいけないと教えないから、汚水を飲んでしまいます。

ハビタットではコミュニティの人たちを支援して、井戸掘り、水場作りをしています。福岡を中心に募金活動をし、集まったお金でアフガニスタンで1本10万円の井戸を掘るという「いのちの水事業」を、今年の記念事業としてやりました。



福岡の国際化に役立つハビタットに

最後に、少し、福岡の国際化、顔の見える国際化、国際協力についてお話ししましょう。

1995年、日本でハビタットのアジア太平洋事務所を誘致しないかという話があり、全国62の自治体が誘致へうごきました。最終的に、東京、横浜、神戸、広島、福岡が残りました。神戸へという意見が一番多かったのですが、私はアジア太平洋事務所であるから、アジアに開かれた地域・福岡がいいと考えました。決め球は福岡空港です。こういう地の利のいい国際空港は世界に3つしかありません。東京から成田に行くには、飛行機が出る5時間前に家を出る、福岡は1時間半前でいい。これだけで3時間半も違います。アジア地域で事業を展開するには福岡です。さて、誘致に当たっては県、市から一杯お金を出してもらっています。ですから県にも市にもハビタットを使って頂きたいと考えています。小学校から呼ばれても参ります。今年の4月から、延べ2000人の方々に話しをしました。九州が育てるハビタットとして、地元とともに生きていきたいというのが、私の切なる願いです。